

トピックス
1. 播州日誌「実習生とともに」
2. 南国土佐を後にして 第7回



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 62

2023年 2月号

小寒～大寒の候 「寒の水」

この時期のなんと月日の経つのが早い事か。するすると砂が零れ落ちるように時が流れる。年齢のせいばかりではなく、世の中が早くはやくと人を急かせる。

1月6日の小寒から20日の大寒まで、暦の上では1年中で一番寒い季節といわれる。

寒さも底の底。「寒い」「寒い」が口癖のように出てしまう。「寒仕込み」という言葉がある。この頃の最も冷たく澄み切った「寒の水」は、清らかな水を必要とする日本酒や醤油・味噌作りには欠かせない。仕込まれた酒は春先に、醤油・味噌は秋過ぎにその仕上がりを見せる。伝統と文化が相まって、日本人である私たちに幸せを運ぶ。早い時の流れも、これら酒などの熟成には、やはりじっくりとした時の流れが必要なのだろう。生きた酵素が化学反応を起こして人々の味の世界に幸せを運ぶ。ゆっくりと、ゆっくりと醸し出される様子は神秘的でさえある。2月3日は節分、そして4日は立春。生きとし生きるものこぞって春の到来を待つ。一日、あと一日。暮らしの、そここにちよとずつ春の足音が……。

春よ来い、早く来い。待ち焦がれるのも、寄る年波のせいかなと、ふと想う。

寒さもあと少し、背筋を伸ばして、皆さん、がんばっていきましょう。



播州日誌

実習生とともに

私の一人暮らしの始まりは、静岡県三島市の下宿。日本大学三島分校で予科を過ごす13人の仲間とともに。農家のおばさんが一人で13人分の炊事、洗濯、清掃、風呂など全部こなして面倒を見てくれる。特に私は世話をかけた一人で、特に大腸炎で入院した時は、1週間毎日病院来てくれて身の回りの世話をしていただいた。他にも遅れがちの下宿代を一言の嫌味も言わず待ってくれたりもした。初めての一人暮らしは、寂しくもあり悲しくもあり、不安とありがたさと、色々な感情がないまぜになって一人で泣いたことも、声を殺して泣いたこともあった。そんな下宿生に、三島のお母さんはいつも寄り添ってくれた。

2022年10月、ベトナムから5人の女性が、私が関与する管理団体であるBM協同組合最初の技能実習生として入国し、日本での1か月の入国後研修を経て私の顧問先であるK社で就業を開始、3年間の実習が始まった。研修先からの移動、そして入寮。先発のカンボジアの実習生5人との共同生活。入社時研修、初めての組

合の監査、法定の手続きが続く。管理団体として、1年目は1か月に一度監査のため会社訪問をする。就業前の1時間健康状態や会社からの連絡・注意事項、実習計画通り実習が行われているかなど監査する。

3か月に1回は、実習実施者（会社）対象に、労働契約上の齟齬がないか、正しく賃金が払われているかなどの監査をする。まだ実習生の顔と名前が一致しないが、元気で明るく頑張っている姿にホッとする。

考えてみれば、遠く母国を離れ、両親や兄弟、夫や子、彼女と別れ、その人たちのために出稼ぎに来ている。会いたくはないのだろうか、寂しくはないのだろうか。ときとしてそっと枕を濡らす時もあるのではないのだろうか。共同生活がそんな寂しさをカバーしているのかもしれない。会った時の笑顔がうれしい。私自身は勝手に家族のようなものだと思っている。かわいい5人の孫娘達。最近福（ふく）先生と呼んでくれる。



マスメディアや SNS では盛んに悪質な会社や管理団体の情報を放映し拡散している。日く日本の技能実習生制度は奴隷制度、地獄のような劣悪な職場環境などなど。高名な弁護士までが平気で奴隷だ、地獄だと見てきたようなことを言う。木を見て森を見ず。多くの監理組合が、本音と建前が大きく乖離している制度的な欠陥に苦しみながら、外国人労働者を大きな戦力だと認め、同じアジアの人間同士だという認識に立って共生の道を探りつつ進んでいる。今や外国人は安い労働力ではない。最賃がベースとはいっても、入国までの費用の負担、住居の世話、受験費用の負担、生活必需品の

提供、法定福利の負担などなど。実質的な負担は時給換算で1500円～1700円に達している。日本人がやらなくなった深夜業、3Kなどの担い手として彼らの奮闘がなければ、日本社会が成り立たない。それに見合う報酬が彼らと彼らの家族、そして彼らの国の経済力となれば、ウイン・ウインの関係になる。単純労働への門戸を開くとのことで、特定技能制度が導入されたが効果があったとはいえない。両制度の改革が必要だ。

私の願いはただ一つ。5人の技能実習生が、3年あるいは5年の実習期間を、健康でケガもなく無事に終え、それなりの貯蓄をして、国に帰り家族や国の経済のために役立たせてほしいと思う。国を離れて働く彼女たちのために、実習実施者（会社）と力を合わせて、彼女たちに寄り添っていきたいと思う。今や外国人が働く国を選ぶ時代。日本が経済面で生き残るためには、快適な職場環境を、安全で衛生的な環境を提供し続けなければならない。



創作 ショートストーリー 不思議な出来事

1月20日大寒の日の朝。何時ものように真っ暗な姫路バイパスの側道を歩き始める。ウォーキングが毎朝のルーチンワークになっている。この日に限って何か不思議な気配を感じていた。側道を抜けて天川の土手に出た途端、不思議な気配が本物の不思議になった。いつもの景色が一変した。全体が薄い乳白色のベールに包まれて、バイパスの騒音もかき消され、深い静寂の中、寒いのに寒くなく何か心地の良い風の中を歩いていた。いつもの場所でストレッチをする。しかし、自分が意識して手足を動かしているのではなく、何か得体のしれないものに支えられ繰り人形のようにになっている。それも優雅な舞のように滑らかにしなやかに体が動く。いや動かされている。最後の深呼吸をして、再び歩き始める。乳白色のベールはそのまま体全体を包み込むように、淡く私の身体にまとわりついている。

不思議だ、何なんだろう。今朝のこの景色は。天川橋の中央に立つ。川面は鏡の様に静まり返って、柔らかに川霧が立っている。まるで幽玄の世界。腰痛予防の体操も、両ひざの屈伸運動も、足裏をお尻に振り上げる体操も例のごとく手足が勝手に動く。弾みをつけて橋を渡り、天川の西岸の土手道に入る。白い霧（もや）に包まれて右手の川面も左手の人家や小高い丘も何も見えない。1キロほどの土手の道は雪のようなものが敷きこまれていて、その上をふわふわと歩いていく。そういえば今朝はいつも出会う人たちの一人とも会っていない。何者かに優しく導かれ、柔らかく背中を押されように自然に足が前に出る。快い気持ちの良い風、静まり返った道をさらに歩く。時折、家族や友人たちの声を聴いたような気がするが意味不明のささやきだ。何時もこの道を歩くとき念ずる、自分や妻や家族、事務員さんや友人やお客様への感謝の言葉も、つぶやいているのだが口にその感覚がなく、その言葉はファンファンと耳の奥で渦を巻いた。これまでの私の人生の、ひとコマひとコマが次々に現れ瞬時に消えてゆく。成功も失敗も、喜びも悲しみも、反省や後悔、愛した人の微笑み、人生の最後に見るだろう景色などが、一瞬の思いに凝縮されて現れそして消えた。



土手の道から、もう一度橋を渡って東岸に至り、天川東公園の中に入る。あたりは相変わらず乳白色のベールの中にあり、甘美な薫りさえ漂っている。惹かれるように押されるように公園のグラウンドを半周し、いつものように、花壇（サークル）のあるコーナーに入る。ひりひりとした感動のような恐怖のような感覚が走る。珍しいことに二匹の猫（公園に住んでいるゴールドとミックス）がきちんと猫座りをして、私を見つめている。いくつかのストレッチも何かに衝き動かされる様に終わる。最後の腕立伏せ50回もやすやすとやり終えた。何時もならそれでコーナーを出て帰路につく。

しかし、この日は何かが違っていた。半径3メートルほどの花壇（サークル）の中央に街燈が立っている。今は冬枯れで花は咲いていない。白い雪のようなものを敷き詰めたサークルの中央、街燈の下あたりからまばゆいばかりの青い閃光が放射線のように放出されている。何だろうと近づく私。こんなところに穴があいているなんて。その時遠くで家族の声がしていた。「お父さんいったらあかん」「お父さん目を開けて」「目を開けて」。確かに声がしていたがだんだん遠くなっていき、やがて何も聞こえなくなった。

乳白色と青い閃光。「死」を思った瞬間、私の身体はそのサークルの中心の穴に吸い込まれていった。スムーズに落ちていく、むしろ快感があって恍惚とした気分。何だろう。落ちていく、落ちていく。体に痛みはない。やがて、私は今までに経験したことのないワールド（景色）の中に立っていた。どうやら私の肉体が減び、魂だけが残って客観的に自分の死を見つめている。苦しみも悲しみもない、喜びと感激に満ちた世界。甘美な空間に立ち尽くしている。

神の様に大いなるもの。大宇宙の生命とエネルギー。その圧倒的な目に見えない濃厚な重力。地球は138億年前、この重力の揺らぎの中で生まれ、現在も生き続けている。肉体はやがて滅びる。逃げられ



ない人間の命の終わり。しかし魂は生き続けさらに進化する。

父や母や死んだ友人たちとも何時でもどんな形でも会うことができる。残してきた家族の幸せを念ずることもできる。お花畑で遊ぶことも音楽を楽しむこともできる。過去も現在も未来さえもここに集結している。だから決して寂しいものではない。すべての欲望と苦しみから解脱して、心豊かに生きることができる。

「死とはそういうこと」。だから決して人は死なないのだ。私は、見たこともないフィールドに立ち、未来の私を確信していた。



～南国土佐を後にして～

第7回 「高知編」 所得倍増 ビートルズ

昭和37年(中1)の頃、池田隼人首相が所得倍増計画を主要政策として打ち出し、日本は経済の高度成長の波に乗ろうとしていた。1\$=365円というのを覚えている。欧米に比べれば敗戦国の日本など、目に入っていなかった時代である。巨人・大鵬・目玉焼きが子供たちの人気を独占していた。エンターテインメントでは「夢で逢いましょう」「シャボン玉ホリデー」が一番人気。坂本九が歌った「上を向いて歩こう」が大ヒット。アメリカでは「スキヤキソング」として、ビルボードの上位にランクインした。やや生活も楽になり、ウキウキした気分があり、余暇を楽しむ余裕が出てきた時代。中学時代は本当に自分にとって楽しいことが多く、青春の入り口のような季節だった。

昭和38年(中2)の時、同級生から「ヨーロッパで、衝撃的なグループサウンドがデビューした」と聞いた。英国発のビートルズだった。デビュー曲「Hard days Night」。成程、今まで聞いたことのないような新しい音楽。斬新なメロディーライン、2ビート、ロックンロール。4人のカッコよさに、世界中の若者が狂喜乱舞。次々に出るシングルはことごとくミリオンセラー。世界中にビートルズ旋風が吹きまわった。修学旅行の思い出も記憶に残っている。小学校では高松方面。当時は蒸気機関車で汽車の旅。開けられない窓と燃料を燃やす臭いが車中に充満していたことを思い出す。屋島金毘羅さん、丸亀、満濃池など。中学でようやく四国を抜け出した。高松から宇野間は「宇高連絡船」。京都、奈良方面。平安神宮、二条城、金閣寺、平等院。鹿と遊んだ若草山、東大寺の大仏さんなど印象深く記憶している。

鉄腕アトム of 放映開始。手塚治虫の未来を見る目は確かで、漫画で見たいろいろなものが、現代に生きている。人型ロボットのアトムは徹底的に平和利用のシンボルだった。正義の味方アトムの活躍に、私たちは拍手喝采した。空飛ぶ自動車、高速道路、携帯電話。当時の夢が現代に生きている。

黒部ダム of 完成、三池炭鉱落盤事故。真っ黒になって救出される炭鉱夫、炭塵を吸ってほとんどが二酸化炭素中毒、寝たきりになってしまった。

アメリカから初めての衛星放送が入ると聞いて注目していたら、なんとその第一声が「米国大統領 ジョン F ケネディが暗殺された」。日本中がびっくり仰天したのを覚えている。

キューバ危機、首都高速1号開通、国産旅客機YS11完成、大鵬6場所連続優勝。内外ともに大きな出来事が続出した。

昭和38年3月、潮江中学校卒業。2年生の時には在校生代表として「送辞」を、3年生の時には、卒業生代表として「答辞」を読んだ。



-SUPPLIED BY ALPHA- MO10500
THE BEATLES
"HELP"